

1. 前回浮世絵に現われた袖飾りについて研究発表を行なったが、今回は、浮世絵の中に、男女の帯が、どのような位置をしめているかを、晴着用のもの、日常用のもの、舞台衣裳に用いるもの等について長着と帯との調和、模様、結び方および帯幅の流行を浮世絵の中に探究し、どのような経過をたどって現代の「帯」が存在するようになったかについて考察したので報告する。

2. 現存する浮世絵版画の中から「帯」を抽出して、作期別、職業別、性別および年齢別的に分類し、長着との調和、寸法、模様、結び方等について考察し、浮世絵の中に描き残された帯が現代に及ぼした影響について究明した。

3. 内的なものであった帯が、外的な服装として表出した小袖とともに表裏一体となって、その長さ幅とを競いながら発達し、遂に広くなった帯幅のために留袖の袖付に無理を生じて、身八つ口があくこととなるまでの経過を究明することができた。また帯は結ぶ人物の容姿、職業等によって、同じ結び方の中にも感覚を異にし、地方によってその用い方に相違がみられた。

これらは現代の和服着装上からもいいうることであり、江戸時代以後、帯の発達はさほどの進展をみていないことが認められた。